

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く掲げ、国際非合法党を建設せよ!

赤報

1987年10月5日 発行
共産主義者同盟 (RG)
第46号 250円 発行人 野村 忠

階級の成熟と社会革命

対話篇

第一幕

ドラランベールとデイドロとの対談(続)

「階級の解体」とみなされるような事態が実は階級の成熟だ、という君の論議は...

第一話

ドラランベール「階級の解体」とみなされるような事態が実は階級の成熟だ、という君の論議は...

第二話

「階級の成熟」といふのは、階級の解体論者からすれば、階級の成熟は階級の解体の前提となる...

第三話

君の見解は要するに、現存の階級状況を認め、階級の成熟を促進してはならない...

第二幕 ドランベールの夢(続)

ドラランベールは昔と同様に眠るが、夢の中で見たのは、第二次大戦後の世界...

第一話

今世紀の世界政治の動向と世界革命の展望について、マルクス...

「階級の成熟」といふのは、階級の解体論者からすれば、階級の成熟は階級の解体の前提となる...

第一話

「階級の成熟」といふのは、階級の解体論者からすれば、階級の成熟は階級の解体の前提となる...

第一話

「階級の成熟」といふのは、階級の解体論者からすれば、階級の成熟は階級の解体の前提となる...

第一話

「階級の成熟」といふのは、階級の解体論者からすれば、階級の成熟は階級の解体の前提となる...

るでしょう。
 スでもね君、さっきのA君の話にあったように、今よりずっと有利な状態にあったヨーロッパの労働運動が、いとも簡単に第一次大戦前の帝国主義の排外主義に屈服してしまつたこと、イリイチの勝利にしても、帝国主義世界戦争というプロレタリアートの国際主義の立場からすれば、決定的な敗北の辛酸をなめさせられたあとで、このことを考えれば、革命的楽観主義だけではいかんともしがたいでしょう。

第一話

A 話がそれなのでもともにもとしますと、ぼくらは六九年に世界革命戦争を目ざして軍事組織RGを結成し、七〇年にくつかりの武装闘争を闘いぬき、その過程で多くの分派を発生させながらも最終的にPBYBYB RG政治軍法建設をめざして、この蜂起に着手する、という経過でさやかですが地下党活動を展開しています。ピエートニッキーさんも言うように、この地下党活動を維持し、発展させることが世界革命の勝利に与つての鍵だと考えています。

ことに一切の重点がおかれていような、そういうものでしょう。ぼくがいま展開している実践は、いまの「赤報」や「共産主義」で提起されている理論的内容を必要としているし、またその内容を実践的な方針として受けとめることができる、そのような実践のさ。

日本に活動家の間でも国際主義の問題は身近になつてい、第三世界現地の活動家と交流する日本帝国主義の悪が、よく見えるようになった、という程度なもので、帰つてくるとまた、もとの日本帝国主義の悪が見えなくなるような旧来のパターンの実践にとりこまてしまつた。こうなると、国際主義とは活動家仲間での勲章の役割しかしてない、という批判も当然出てきます。

運動しか頭のない君が信じられない、というのなら、無理して信じなくともよいという他はない。ところでいま君が居る闘争現場は、敵から打たれることによつて味方が団結する、という、そういう場所になつていないか、それとは逆になつていないか、現実を攻撃して、弱い面を攻撃して、弱い面を攻撃し、その結果、敵から猛烈な反撃を受けながらも、しかしその反撃をこやしにして、味方の団結を強めてゆく、そのような大衆運動をこちらのヘゲモニーで設定することができような時代になつた、また、うせねばならないと考えている階級の成熟というものは、このような実践論と一体となつて提起されている。

ス 敵の弱いところを突く、というの、被抑圧階級の闘争の原則だ。ところがいまは、プロレタリアートの力量が社会革命を実現する、という点で成熟してきているから、社会革命の展望をもつてはいない諸党派の指導部は、どこが弱いところか、わからぬのだね。その結果、逆に強いところを大衆運動をしかけ、運動を解体させ、社会革命を遠ざけたら、指導部の地位だけは保全する、というところになつていないか。

X マルクス葬送派が一時大さわぎしていたけれども、あつたこと消えてしまつた。彼らは何か独自の思想を展開したわけでは全然なかつたのだから、Z そうだね。旧くはベルンシュタインやグレンデルフの言つたことの繰り返しだし、日本でも民社党や民主社会主義者たちが言つていたことだ。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉は、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

日本に活動家の間でも国際主義の問題は身近になつてい、第三世界現地の活動家と交流する日本帝国主義の悪が、よく見えるようになった、という程度なもので、帰つてくるとまた、もとの日本帝国主義の悪が見えなくなるような旧来のパターンの実践にとりこまてしまつた。こうなると、国際主義とは活動家仲間での勲章の役割しかしてない、という批判も当然出てきます。

運動しか頭のない君が信じられない、というのなら、無理して信じなくともよいという他はない。ところでいま君が居る闘争現場は、敵から打たれることによつて味方が団結する、という、そういう場所になつていないか、それとは逆になつていないか、現実を攻撃して、弱い面を攻撃して、弱い面を攻撃し、その結果、敵から猛烈な反撃を受けながらも、しかしその反撃をこやしにして、味方の団結を強めてゆく、そのような大衆運動をこちらのヘゲモニーで設定することができような時代になつた、また、うせねばならないと考えている階級の成熟というものは、このような実践論と一体となつて提起されている。

ス 敵の弱いところを突く、というの、被抑圧階級の闘争の原則だ。ところがいまは、プロレタリアートの力量が社会革命を実現する、という点で成熟してきているから、社会革命の展望をもつてはいない諸党派の指導部は、どこが弱いところか、わからぬのだね。その結果、逆に強いところを大衆運動をしかけ、運動を解体させ、社会革命を遠ざけたら、指導部の地位だけは保全する、というところになつていないか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉は、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

日本に活動家の間でも国際主義の問題は身近になつてい、第三世界現地の活動家と交流する日本帝国主義の悪が、よく見えるようになった、という程度なもので、帰つてくるとまた、もとの日本帝国主義の悪が見えなくなるような旧来のパターンの実践にとりこまてしまつた。こうなると、国際主義とは活動家仲間での勲章の役割しかしてない、という批判も当然出てきます。

運動しか頭のない君が信じられない、というのなら、無理して信じなくともよいという他はない。ところでいま君が居る闘争現場は、敵から打たれることによつて味方が団結する、という、そういう場所になつていないか、それとは逆になつていないか、現実を攻撃して、弱い面を攻撃して、弱い面を攻撃し、その結果、敵から猛烈な反撃を受けながらも、しかしその反撃をこやしにして、味方の団結を強めてゆく、そのような大衆運動をこちらのヘゲモニーで設定することができような時代になつた、また、うせねばならないと考えている階級の成熟というものは、このような実践論と一体となつて提起されている。

ス 敵の弱いところを突く、というの、被抑圧階級の闘争の原則だ。ところがいまは、プロレタリアートの力量が社会革命を実現する、という点で成熟してきているから、社会革命の展望をもつてはいない諸党派の指導部は、どこが弱いところか、わからぬのだね。その結果、逆に強いところを大衆運動をしかけ、運動を解体させ、社会革命を遠ざけたら、指導部の地位だけは保全する、というところになつていないか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉は、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

第二幕 或る座談

ちの問題意識をふまえることも必要ではないでしょうか。イリイチは活動の転換を提起する際に、いつ

のが、一番いけないことだが、そのうらなないためには、旧来の足場を担っている人たちが自身の政治的自覚が問われる。

X あれをどう読めば階級の解体の主張となるのか、軽率と

Z 自分エゴとつながらない、という意見は聞いて

X 彼の言いたいのは、君が

第二話

X マルクス葬送派が一時大さわぎしていたけれども、あつたこと消えてしまつた。彼らは何か独自の思想を展開したわけでは全然なかつたのだから、Z そうだね。旧くはベルンシュタインやグレンデルフの言つたことの繰り返しだし、日本でも民社党や民主社会主義者たちが言つていたことだ。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉は、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

日本に活動家の間でも国際主義の問題は身近になつてい、第三世界現地の活動家と交流する日本帝国主義の悪が、よく見えるようになった、という程度なもので、帰つてくるとまた、もとの日本帝国主義の悪が見えなくなるような旧来のパターンの実践にとりこまてしまつた。こうなると、国際主義とは活動家仲間での勲章の役割しかしてない、という批判も当然出てきます。

運動しか頭のない君が信じられない、というのなら、無理して信じなくともよいという他はない。ところでいま君が居る闘争現場は、敵から打たれることによつて味方が団結する、という、そういう場所になつていないか、それとは逆になつていないか、現実を攻撃して、弱い面を攻撃して、弱い面を攻撃し、その結果、敵から猛烈な反撃を受けながらも、しかしその反撃をこやしにして、味方の団結を強めてゆく、そのような大衆運動をこちらのヘゲモニーで設定することができような時代になつた、また、うせねばならないと考えている階級の成熟というものは、このような実践論と一体となつて提起されている。

ス 敵の弱いところを突く、というの、被抑圧階級の闘争の原則だ。ところがいまは、プロレタリアートの力量が社会革命を実現する、という点で成熟してきているから、社会革命の展望をもつてはいない諸党派の指導部は、どこが弱いところか、わからぬのだね。その結果、逆に強いところを大衆運動をしかけ、運動を解体させ、社会革命を遠ざけたら、指導部の地位だけは保全する、というところになつていないか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉は、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

X マルクスの学説の創造的発展、という言葉を、たとえは不破三でも言つただけで、ポイントはどこにあるかと考えているのか。

第三話

X 「階級の解体」として現象している事態と階級の成熟とを、どうして階級対立の非和解性、という問題をアルジョアとプロレタリアの現実的利害の対立という点で捉えて来たか、という点で、現在では階級対立の非

話

話

話

話

科学批判—権力論の接合へ

はじめに

科学技術の発展は、生産力の関係で言えば富の発展の観念的かつ実践的な一現象形態であり、そして文化の複合体としての規定の動因でもある。

科学「善」と中立のものとして、「資本主義の悪」への還元法をとる通俗的マルクス主義のイデオロギーは、幻滅にさらされてすでに久しい。過渡期世界の階級階級関係が科学技術を大きく組みこんで存在しているのであり、所有から資本家を開放して

(一) 科学と権力論の予約関係

いわゆるイデオロギー攻勢に對してわれわれは、それがつかる現代を原理の高度な現象形態として、物象化を権力論として批判する道を進まなければならない。もちろんここで「デカルト以来の知の体系」に近代の諸悪を求めるといった議論をしようというのではない。ME導

「権力論」としては、基本的問題を何れも解決しない既成の政治の無能性と相互関係をあげておこうである。

今日において、政治選択の幅が狭められているのは「事実への無条件降伏」と言われる事態に大きく負っている。どのよう

もなお商品とその物神化が廃止されていない社会関係もまた、科学を含めた社会革命を中途に

他方、高度資本主義で科学技術の発展が格子状の従属様式の発展となつていくことは、金融革命にともなう情報化社会論などのなかで、管理社会論として指摘されてきた。大量生産にだけ

個人が演じられる日常性は、物象によって非人格的に編成されていく。そこでの自己同一性は、商品環境におかれていく。対象化を通しての

「権力論」としては、基本的問題を何れも解決しない既成の政治の無能性と相互関係をあげておこうである。

は、五月革命をへた「アンチ・オイデウス」などでとりあげられたところである。

科学技術の「社会環境化」(梅林宏道)とその自律性の排他的な力の増大は、あくまでもこの

個人が演じられる日常性は、物象によって非人格的に編成されていく。そこでの自己同一性は、商品環境におかれていく。対象化を通しての

「権力論」としては、基本的問題を何れも解決しない既成の政治の無能性と相互関係をあげておこうである。

代のものであったというように、体系としての科学が組みあがられたのは、自然経済から切り離された近代以降の社会的意識の

「科学技術の「社会環境化」(梅林宏道)とその自律性の排他的な力の増大は、あくまでもこの

個人が演じられる日常性は、物象によって非人格的に編成されていく。そこでの自己同一性は、商品環境におかれていく。対象化を通しての

「権力論」としては、基本的問題を何れも解決しない既成の政治の無能性と相互関係をあげておこうである。

問題の神秘化や自己催眠は断ちきれよう。だが「何よりも」

「科学技術の「社会環境化」(梅林宏道)とその自律性の排他的な力の増大は、あくまでもこの

個人が演じられる日常性は、物象によって非人格的に編成されていく。そこでの自己同一性は、商品環境におかれていく。対象化を通しての

「権力論」としては、基本的問題を何れも解決しない既成の政治の無能性と相互関係をあげておこうである。

(二) 政治の社会的再規定の課題

① 社会による科学の政治化

権力論と科学批判との関連は「知の技術と権力の戦略との間

あり、宗教的または科学的決定論は解釈をほどくべき権威と提

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

「知の技術と権力の戦略との間

あり、宗教的または科学的決定論は解釈をほどくべき権威と提

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

② パラダイム論の政治観

社会現象としての科学とその政治化を批判的にすえてい

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

社会現象としての科学とその政治化を批判的にすえてい

(三) 「前線配置」と意識—構造論

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

「科学の政治化」は、科学技術のイデオロギー化を、その還元主義的

り、そこから広重の「体制化」論をとりあげ「前線配置」の考へ方を一歩前進とし、さらに柴谷の「反科学論」の評価につな

中岡は広重らと共有する問題意識のありようを「われわれの頭の中に『科学』と、対象化された社会化されたものとしてある『科学』との間にある分裂(一五頁)の自覚として語っている

彼らの科学史の作業は、まず科学の専門的職業集団の存在に問題意識を投射して進められたのであった。科学のいわば社会的な配分は、広重によれば体制化によって前線配置がめざら

の行動様式、科学の生産過程が一つ時代の研究分野の最前線が軍事研究費の流れといったコントロールで決まり、それによって配置されたなかで研究者個人の精神的活動が展開されて

重の「前線配置」論を評価するところであった。そしてパラダイム論からしても、科学者はその科学環境に直接にさらされてお

通して物を見、個人の成果もまたその共同体に返還される(コントロールはパラダイムを、その時代の科学の通貨としている)これを基点に展開されたのが、柴谷の科学批判であった。

中岡は柴谷の党派性論に対して危惧を示しているが、これは意識「社会構造論と権力論」とのつながりが解決されていないことに対応しているであろう。そのつながりを社会システム論によってつなげる試みもあ

らな。広重の「体制化」論の弱点は、とりわけイデオロギー性の批判にあった。そこからすればコントロールが民衆にゆだねられるのは、主体が組みこまれているその客体自体の変革を文化革命として含むのである。

た構造「見えなくさせる論理」といったことを、その問題意識から述べている。

科学のオートノミー、啓蒙主義の「科学精神」において完結している心的構造の中には「職業集団としての自己自身の内部にある矛盾、制度そのものの内部から発生してゆくもの、それらと社会とのつながり、などを対象化する契機は存在しない。自らの内部から発生したものは

一九七〇年代に一つの橋頭堡をつくることになる科学批判の横出は、資本主義批判が認識論的な問題を切り離したがるものとしてともなうということもあ

も明らかであるが、梅林宏道らの同人誌「ぶらぶら」は、六〇年代後半の大学闘争、ベトナム反戦闘争のなかで「科学技術者の認識の部分的性」を問うものとして出発している。存在と認識の問題として、梅林の語るところでは次のようである。

「認識を即目的に認識の問題として接する態度そのものの典型として科学技術的認識があり、したがって、認識を認識の問題として論じることそのものが人間存在に対する部分的性こそが問題とされている」といふべきである。世界内のありとあらゆる具体性の真只中に身を置いた一人の人間が、即目的な認識の領域に足を踏み入れるときの否定性を問うたのである。(「抵抗の科学技術と人間」一四頁)

梅林はマンハイムのいわゆる「存在被拘束性の立場をとって、なんらかの全体的認識に位置される部分性ではなく、存在論的な問題への移行を設定しているように見える。例えば公害の発生が、全体的認識に接近する方法のもつ「錯誤」ではなく、資本主義的「不正」によるという見解に対して、それらが常に存在を通してつながっている事実こそ前提であるべきだとする。

中岡は「見えなくさせる論理」の透過が、進歩的知識者だけでなく高度成長の日本資本主義のすみずみまでのものであったとす。後者への批判の憤出のなかに「科学そのもの」の虚構への批判を正当に位置づけている。中岡のいう「もののみえくる過程」の問題に対しては、われわれは実証主義批判と商品批判との関連といった問題へと考察を進める必要がある。

(四) 実証主義への存在論的批判

① 存在論的な問題への移行

両者が截然と区別されて論じられるところに、これは科学の党派性にかかわっていることな

の主張に至るものである。そこで注意すべきは、階級関係についての彼の考え方と科学技術の党派性批判との関連である。

「認識を即目的に認識の問題として接する態度そのものの典型として科学技術的認識があり、したがって、認識を認識の問題として論じることそのものが人間存在に対する部分的性こそが問題とされている」といふべきである。世界内のありとあらゆる具体性の真只中に身を置いた一人の人間が、即目的な認識の領域に足を踏み入れるときの否定性を問うたのである。(「抵抗の科学技術と人間」一四頁)

梅林はマンハイムのいわゆる「存在被拘束性の立場をとって、なんらかの全体的認識に位置される部分性ではなく、存在論的な問題への移行を設定しているように見える。例えば公害の発生が、全体的認識に接近する方法のもつ「錯誤」ではなく、資本主義的「不正」によるという見解に対して、それらが常に存在を通してつながっている事実こそ前提であるべきだとする。

中岡は「見えなくさせる論理」の透過が、進歩的知識者だけでなく高度成長の日本資本主義のすみずみまでのものであったとす。後者への批判の憤出のなかに「科学そのもの」の虚構への批判を正当に位置づけている。中岡のいう「もののみえくる過程」の問題に対しては、われわれは実証主義批判と商品批判との関連といった問題へと考察を進める必要がある。

(五) 物象依存と「産業化科学」

① 物象依存と「産業化科学」

梅林は、核開発のマンハッタン計画からベトナム戦争における科学動員、あるいは環境汚染といった流れから、実証主義的理性への批判、科学の社会的責任論への批判を次に見るように

「彼らの理性は、研究の世界に引き、学問構成での「党派的自然」(歴史の党派性)の見地をとっている。

「彼らの理性は、研究の世界に引き、学問構成での「党派的自然」(歴史の党派性)の見地をとっている。

「彼らの理性は、研究の世界に引き、学問構成での「党派的自然」(歴史の党派性)の見地をとっている。

「彼らの理性は、研究の世界に引き、学問構成での「党派的自然」(歴史の党派性)の見地をとっている。

(六) パラダイム論の適用限界

① 巨大化科学と還元論

科学批判にあたって実証主義科学と商品とを関連づけている点

梅林の「物」自然化は、軍事および情報科学の問題は別に

梅林の「物」自然化は、軍事および情報科学の問題は別に

梅林の「物」自然化は、軍事および情報科学の問題は別に

梅林の「物」自然化は、軍事および情報科学の問題は別に

(七) 巨大化科学と還元論

① 巨大化科学と還元論

科学批判にあたって実証主義科学と商品とを関連づけている点

梅林の「物」自然化は、軍事および情報科学の問題は別に

梅林の「物」自然化は、軍事および情報科学の問題は別に

梅林の「物」自然化は、軍事および情報科学の問題は別に

梅林の「物」自然化は、軍事および情報科学の問題は別に

「われわれは核の世界と日常性を支配する科学的・生物学的な古典物理学の世界を結びつけないで、それを制御し、たまたま電力へと転換する技術は古典物理学・機械論の原理にもとづくものである。……それを取り扱う人間や、取り巻く環境は、まったく自然の生物学的原理に支配されている。」(朝日選書 一五九頁)

関連して、現代の科学技術を石油を使う技術にすぎぬとする植田敦は、原子力「石油の缶詰」を「缶詰にして使うことに価値がある場合」(「石油と原子力に未来はあるか」(亜紀書房)に言及している。先の把握では高木は「核そのものの支配性」と核を利用した権力支配という二元論のなかにとどまっている。

核科学についての技術的・物的な説明を保障していない。

ここで日常世界の技術的・物的な還元が社会的な規定を欠いていることを、二元論の説明の起点として見てとれよう。ちなみにマルクスにとっては、「技術学は、自然にたいする人間の能動的態度を、彼の生活の・したかつて彼の社会的諸関係およびそれらからわきだす精神的諸表象の・直接的生産過程を、あらわにする」(「資本論」I、三八九頁)ということであった。

このようなものとして、機械は意志の器官であった。

高木の巨大科学批判は、実証科学的な境界をそのまますべての虚構的変質、巨大化と強度の極限化を主題とし、それに對して民衆との共通の言葉を用いることなどを主張する。そこでは、政治的理論の論理による統合としての「危機科学」が、人間の論理や感性の優位、自然との相互主権関係を回復すべきことが、知的あり方の変革にかかわって文化革命の主張となされる。

だがそこに労働の論理(社会的労働)が欠けていることを、われわれは見いださざるを得ない。人間の生そのものとの鋭い対峙というが、高木の言う主要矛盾であり、「商品としての科学」と文化革命の主張とをならん

「われわれは核の世界と日常性を支配する科学的・生物学的な古典物理学の世界を結びつけないで、それを制御し、たまたま電力へと転換する技術は古典物理学・機械論の原理にもとづくものである。……それを取り扱う人間や、取り巻く環境は、まったく自然の生物学的原理に支配されている。」(朝日選書 一五九頁)

で、いわば前編配置論の延長に政治的批判がなされるのは「労働の論理」の欠落によって偶然ではないであろう。

資本物神が完成すればするほどますます科学の適用は超越的な統御の技術という姿をとる。そして、物神の文明がその身体に機械論を体化している以上、社会的意識形態はそれに規制されている他はない。

「このように、生の自然の過程よりも、商品生産という『有用性』と結び付いたことにより、実証科学が今日大きな力を持つようになつたのです。」(「教養文庫」四四一、四五頁)

四四号参照) その「経済学上の解釈とは違った意味」で「労働」が、高木の場合はどうであるかについて、まず後述する。そしてマルクスの場合、自然との間の質料変換が攪乱される、かくして同時に富の源泉たる土地と労働者から掠奪する技術の進歩だと、質料交換の自然発生

② 危機論における傾斜

「原來的な世界観」の未熟というように彼の議論は進むことになる。だがそうした逆上りせずとも、身近な商品批判というところでの自縛性をわれわれは指摘できる。

このこと規定されて、従来存在論的な科学批判は、科学の私的有用性に対する批判という圏を「脱構築」することは、経験主義に自らを大きくくだねるものだったであろう。

それは、しかし高木の場合には必ず先の部分でとぎれる。彼は巨大科学が伝統的な実証性を超えて変質しているという状況を認識し、科学のあり方のいわば市民的な変革にたいする前提におく。この危機論の接近において、批判が依って立つところは「個人の生活上の反感」であり「長期的展望のなさ」としての「場あつたりの反動主義」の科学への、どちらかといえば政治的批判が強調されている。

「状態を超越化してはいない。自然科学的抽出は、確かに社会的な資源配分と自然環境との緊張を『未来の搾取』などと表示する。しかし自然との質料変換はあくまでも歴史的な場面であり、富のあり方に規制される。人間存在の客観的諸条件と活動的定在との分離におかれて

(七) 社会化の「弁証法的像」へ

「政治的理論の論理による統合としての『危機科学』が、人間の論理や感性の優位、自然との相互主権関係を回復すべきことが、知的あり方の変革にかかわって文化革命の主張となされる。」

「このように、生の自然の過程よりも、商品生産という『有用性』と結び付いたことにより、実証科学が今日大きな力を持つようになつたのです。」

「原來的な世界観」の未熟というように彼の議論は進むことになる。だがそうした逆上りせずとも、身近な商品批判というところでの自縛性をわれわれは指摘できる。

「われわれは核の世界と日常性を支配する科学的・生物学的な古典物理学の世界を結びつけないで、それを制御し、たまたま電力へと転換する技術は古典物理学・機械論の原理にもとづくものである。……それを取り扱う人間や、取り巻く環境は、まったく自然の生物学的原理に支配されている。」

「このように、生の自然の過程よりも、商品生産という『有用性』と結び付いたことにより、実証科学が今日大きな力を持つようになつたのです。」

「原來的な世界観」の未熟というように彼の議論は進むことになる。だがそうした逆上りせずとも、身近な商品批判というところでの自縛性をわれわれは指摘できる。

(八) 物象の社会的力の切断

「われわれは核の世界と日常性を支配する科学的・生物学的な古典物理学の世界を結びつけないで、それを制御し、たまたま電力へと転換する技術は古典物理学・機械論の原理にもとづくものである。……それを取り扱う人間や、取り巻く環境は、まったく自然の生物学的原理に支配されている。」

「このように、生の自然の過程よりも、商品生産という『有用性』と結び付いたことにより、実証科学が今日大きな力を持つようになつたのです。」

「原來的な世界観」の未熟というように彼の議論は進むことになる。だがそうした逆上りせずとも、身近な商品批判というところでの自縛性をわれわれは指摘できる。

「われわれは核の世界と日常性を支配する科学的・生物学的な古典物理学の世界を結びつけないで、それを制御し、たまたま電力へと転換する技術は古典物理学・機械論の原理にもとづくものである。……それを取り扱う人間や、取り巻く環境は、まったく自然の生物学的原理に支配されている。」

「このように、生の自然の過程よりも、商品生産という『有用性』と結び付いたことにより、実証科学が今日大きな力を持つようになつたのです。」

「原來的な世界観」の未熟というように彼の議論は進むことになる。だがそうした逆上りせずとも、身近な商品批判というところでの自縛性をわれわれは指摘できる。

「われわれは核の世界と日常性を支配する科学的・生物学的な古典物理学の世界を結びつけないで、それを制御し、たまたま電力へと転換する技術は古典物理学・機械論の原理にもとづくものである。……それを取り扱う人間や、取り巻く環境は、まったく自然の生物学的原理に支配されている。」

「このように、生の自然の過程よりも、商品生産という『有用性』と結び付いたことにより、実証科学が今日大きな力を持つようになつたのです。」

「原來的な世界観」の未熟というように彼の議論は進むことになる。だがそうした逆上りせずとも、身近な商品批判というところでの自縛性をわれわれは指摘できる。

「われわれは核の世界と日常性を支配する科学的・生物学的な古典物理学の世界を結びつけないで、それを制御し、たまたま電力へと転換する技術は古典物理学・機械論の原理にもとづくものである。……それを取り扱う人間や、取り巻く環境は、まったく自然の生物学的原理に支配されている。」

「このように、生の自然の過程よりも、商品生産という『有用性』と結び付いたことにより、実証科学が今日大きな力を持つようになつたのです。」

「原來的な世界観」の未熟というように彼の議論は進むことになる。だがそうした逆上りせずとも、身近な商品批判というところでの自縛性をわれわれは指摘できる。

社会革命と文化 第二部 第一回

第一章 マルクス物象化論の形成過程

第一節 物象化論とは何か

(一) 上部構造の「根」の 説明

今日物象化論が流行している。マルクスも言っているように、市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない。マルクスの物象化論とは何か、といった基本的な問題に就いて一人一説といった状態である。

一般的にはマルクスの物象化論は物象化論と区別づけられてきた。マルクスは宗教批判の方法を法や国家にだけなく、市民社会の分析にも適用して、従来の経済学が超えられなかった一線を越えていった。

その成果は「資本論」に結実しているが、マルクスにとって、もちろん市民社会を解剖したことは目標達成を意味してはいなかった。むしろ、市民社会の解剖によって明らかとなった、法的諸関係及び国家諸形態

の根から、社会的、政治的および精神的な生活過程を説明することが、その目標であった。ここでは比較的「根」として、この根にあたるものとしておくが、市民社会における人格の物象化と物象の人格化とはなにからうか。そうであれば、マルクスの物象化論とは、法律的政治的・法的諸意識形態の解明の手がかりとなるはずである。

そのうえで、われわれはマルクスの政治理論(ここで政治というのはいくつかの意味で)を論ずることも必要である。レーニンの共産主義的政治を継承して、明らかな前提条件として、物象化論の形成過程を論ずる。

(二) 市民社会の三種の 物象化

マルクスの物象化論の形成過程をどう把握するか、この点について、概略をあらかじめ述べておく。その際、疎外論から物象化論への発展を主張した廣松渉の説とからみて提起することにする。

廣松は周知のように「ドイツイデオロギー」で疎外論が克服され、物象化論の展開がはじまると述べている。

その結果、物象化の原理を分業による「協働そのものが自由意志的でなく自然発生的であるがために、当の諸個人の眼には、彼ら自身の威力が統合されたものと見え、疎遠な、彼らの外部に自存する強力であるかのように見える(廣松版「ドイツイデオロギー」三七頁、意識の方格化、というところにあること)も判明する。

ところが廣松の場合、物象化の原理を「ドイツイデオロギー」に、それとわれわれの設例

は、物象化には三種のタイプがあることを明らかにしたと見て、

「第一、商品及び貨幣における物象化。社会的分業を含む。」

「第二、自然発生的な分業の下での協働がもたらす労働の生産力の物象化。」

「第三、利子生み資本における物象化。」

第二については、マルクスが資本の直接的生産過程及び流通過程、さらには総過程の一部として述べられている事態に関連し、多様であるが、ここでは一例として典型をあげるにとめておく。

この三つの場合について、物象の成立はそれぞれ異なる様式でなされていることは明らかである。それぞれ、それぞれの共通性は、人格の物象化、物象の人格化、というところにあること

も判明する。ところが廣松の場合、物象化の原理を「ドイツイデオロギー」に、それとわれわれの設例

「第一、商品及び貨幣における物象化。社会的分業を含む。」

「第二、自然発生的な分業の下での協働がもたらす労働の生産力の物象化。」

「第三、利子生み資本における物象化。」

第二については、マルクスが資本の直接的生産過程及び流通過程、さらには総過程の一部として述べられている事態に関連し、多様であるが、ここでは一例として典型をあげるにとめておく。

この三つの場合について、物象の成立はそれぞれ異なる様式でなされていることは明らかである。それぞれ、それぞれの共通性は、人格の物象化、物象の人格化、というところにあること

も判明する。ところが廣松の場合、物象化の原理を「ドイツイデオロギー」に、それとわれわれの設例

「第一、商品及び貨幣における物象化。社会的分業を含む。」

「第二、自然発生的な分業の下での協働がもたらす労働の生産力の物象化。」

「第三、利子生み資本における物象化。」

第二については、マルクスが資本の直接的生産過程及び流通過程、さらには総過程の一部として述べられている事態に関連し、多様であるが、ここでは一例として典型をあげるにとめておく。

この三つの場合について、物象の成立はそれぞれ異なる様式でなされていることは明らかである。それぞれ、それぞれの共通性は、人格の物象化、物象の人格化、というところにあること

第二節 若きマルクス と物象化

(一) 国民経済学の範疇としての物象化に対する宗教批判の適用による批判

物象化論は、この多様な宗教批判の方法の適用の成果である。廣松説については「ドイツイデオロギー」のところで再びいう枠組が制約になること、ここでは第二に相当するところを求めてみる。

「第一、物象化論の立場から論を展開しているのは、丁度『資本論』で第二の物象化が述べられている部分で解説している山本耕一だけである。」

さらに、人格の物象化、物象の人格化を疎外論とみなしてしまおう(三二四頁)ミスリーディングがある。第一の物象化について分析した「ミル評注」や、さらに「要綱」までもが疎外論とされざるをえず、第一の物象化が物神性の問題としてしか扱えられなくなってしまう。そのうえ、われわれはマルクスの政治理論(ここで政治というのはいくつかの意味で)を論ずることも必要である。レーニンの共産主義的政治を継承して、明らかな前提条件として、物象化論の形成過程を論ずる。

このように見ると、疎外論から物象化論への発展を説く廣松のマルクス解釈(ここでは物象化の哲学としての廣松説)は、物象化の哲学として(廣松説)の限界も明らかになる。

「経手稿」で展開されている「ドイツイデオロギー」をとりあげると、われわれがあげた物象化の三つのタイプは、第一と第二が「ミル評注」で、第二が「経手稿」で、第一と第二が「ドイツイデオロギー」で述べられている。

この三つの文脈で述べられている事柄を、マルクスは「要綱」で統合しようとする。「要綱」でこの成果を背景に書き下した「経済学批判」の商品章でマルクスは第一の物象化の分析に決定的な飛躍をなし、このあとひきつづいて書かれた一八六三三年草稿では貨幣の資本の転化をある土地所有が完全に私的の運動のなかで引っぱりこまれて商品となること、所有者の支配がいついそ政治的色彩をぬき、きつて純然たる私的の所有の支配、資本の支配として現われ、所有者と労働者との関係が利用者と被利用者との国民経済学的関係へ還元されること、所有者とその所有のいささかの人格的関係がやみ、所有がただ物象的、物質的な富となること……(同、九〇頁)

このようにマルクスは国民経済学が、労働を商品とみなし、資本や土地所有を物象的な力とみなしていることを知る。しかし彼は、国民経済学の理論水準

で満足しはしなかった。彼は宗教批判の方法を国民経済学の批判に適用する。

疎外された労働論の冒頭でマルクスは評注の部分で学んだ事柄を簡単にまとめ、国民経済学への批判を次の観点から開始する。

「国民経済学は私的の所有の事実から出発するが、これをわれわれに解明しない。それは私的の所有が現実のなかで経る物質的過程を、一般的な抽象的な諸方式に表現する。するとこれは国民経済学にとって諸法則と見なされる。それはこれらの法則を理解しない、すなわち、これらがどのようにして私的の所有の本質から生じるかを証明しない。」(同、九六頁)

ここで展開されているマルクスの国民経済学の私的の所有論への批判は、労働—私的の所有—物象—国民経済学、という関連でなされるが、それは人間—神—哲学(哲学)という関連で念頭におかれたうえでのことである。

だから、マルクスは、国民経済学が把えた諸法則を、神の節理と同様に疎外されたものとして扱えなす。そうすると私的の所有の概念が解明されはしめる。マルクスは国民経済学が明らかにした「事実」を次のように扱えなす。

「この事実が表現するのは次のこと以上のものでもない、すなわち、労働が生産することの対象、労働の生産物は、労働にたいして、ある疎遠なものとして、生産者に依存しない力として立ち向かうということ。労働の生産物とは、労働が一つの対象のうちに固定され、物的ならしめられたものであり、労働の対象化である。労働の実現とは、労働の対象化である。この労働の実現が国民経済学的状態において、労働の現実性、剝奪として現われ、対象化の対象の喪失および対象の奴隷たることとして、我がものとする獲得が疎外として、外化として現われる。」(同、九八頁)

この疎外について、マルクスは、人間の類の本質を神として外化させる宗教的疎外の批判の方法を応用して次のように展開する。

「ミル評注」をマルクス物象化論の形成過程の解明という観点から読むとき、そこでは第一の商品、貨幣、及び第三の利子生み資本、という二種の物象化がとりあげられていることに注目しなければならない。

もちろん、後に「資本論」で完成されることになるような物象化論の展開をそこに期待することとはできないが、「経手稿」が資本家的私的の所有を物象化の対象としてとりあげたことを批判したと同様に、ここでは、商品、貨幣及び信用を物象及び物象相互の関係を把えて、これら解明が試みられているのであって、マルクスの物象化論の出発点としての意義をもっているのである。

「ミル評注」も、貨幣及び交換を、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。

「ミルは貨幣を交換の媒介者として、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。物象を物神としてあがめるのではなく、物象を人々の社会的関係として把えようとする物象批判の観点から、宗教批判の方法が適用されることにより、しっかりと打ち立てられているのである。」

貨幣を物象として把え、これを批判して、そこに人間の社会的な行為の疎外を読みとったマルクスは、つぎに、私的の所有の属性にならざることを、私的の所有の属性に把握しようとしている。

「なぜ私的の所有は、貨幣制度にまで進まなければならないのか

(二) 物象の解読へ 「ミル評注」

だから、マルクスの二つの課題についても、最初のものについては共産主義論を扱うところ、疎外論そのものにとりあげられる。

あとのほうの課題については、マルクスがこの課題を書き留めるときに何を念頭に置いたかは別にして、この課題そのものは、貨幣の資本への転化を解明することによって解決される。このことを指摘しておいて、「ミル評注」に移ろう。

「ミル評注」をマルクス物象化論の形成過程の解明という観点から読むとき、そこでは第一の商品、貨幣、及び第三の利子生み資本、という二種の物象化がとりあげられていることに注目しなければならない。

もちろん、後に「資本論」で完成されることになるような物象化論の展開をそこに期待することとはできないが、「経手稿」が資本家的私的の所有を物象化の対象としてとりあげたことを批判したと同様に、ここでは、商品、貨幣及び信用を物象及び物象相互の関係を把えて、これら解明が試みられているのであって、マルクスの物象化論の出発点としての意義をもっているのである。

「ミル評注」も、貨幣及び交換を、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。

「ミルは貨幣を交換の媒介者として、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。物象を物神としてあがめるのではなく、物象を人々の社会的関係として把えようとする物象批判の観点から、宗教批判の方法が適用されることにより、しっかりと打ち立てられているのである。」

貨幣を物象として把え、これを批判して、そこに人間の社会的な行為の疎外を読みとったマルクスは、つぎに、私的の所有の属性にならざることを、私的の所有の属性に把握しようとしている。

「なぜ私的の所有は、貨幣制度にまで進まなければならないのか

「ミル評注」をマルクス物象化論の形成過程の解明という観点から読むとき、そこでは第一の商品、貨幣、及び第三の利子生み資本、という二種の物象化がとりあげられていることに注目しなければならない。

もちろん、後に「資本論」で完成されることになるような物象化論の展開をそこに期待することとはできないが、「経手稿」が資本家的私的の所有を物象化の対象としてとりあげたことを批判したと同様に、ここでは、商品、貨幣及び信用を物象及び物象相互の関係を把えて、これら解明が試みられているのであって、マルクスの物象化論の出発点としての意義をもっているのである。

「ミル評注」も、貨幣及び交換を、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。

「ミルは貨幣を交換の媒介者として、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。物象を物神としてあがめるのではなく、物象を人々の社会的関係として把えようとする物象批判の観点から、宗教批判の方法が適用されることにより、しっかりと打ち立てられているのである。」

貨幣を物象として把え、これを批判して、そこに人間の社会的な行為の疎外を読みとったマルクスは、つぎに、私的の所有の属性にならざることを、私的の所有の属性に把握しようとしている。

「なぜ私的の所有は、貨幣制度にまで進まなければならないのか

「ミル評注」をマルクス物象化論の形成過程の解明という観点から読むとき、そこでは第一の商品、貨幣、及び第三の利子生み資本、という二種の物象化がとりあげられていることに注目しなければならない。

もちろん、後に「資本論」で完成されることになるような物象化論の展開をそこに期待することとはできないが、「経手稿」が資本家的私的の所有を物象化の対象としてとりあげたことを批判したと同様に、ここでは、商品、貨幣及び信用を物象及び物象相互の関係を把えて、これら解明が試みられているのであって、マルクスの物象化論の出発点としての意義をもっているのである。

「ミル評注」も、貨幣及び交換を、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。

「ミルは貨幣を交換の媒介者として、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。物象を物神としてあがめるのではなく、物象を人々の社会的関係として把えようとする物象批判の観点から、宗教批判の方法が適用されることにより、しっかりと打ち立てられているのである。」

貨幣を物象として把え、これを批判して、そこに人間の社会的な行為の疎外を読みとったマルクスは、つぎに、私的の所有の属性にならざることを、私的の所有の属性に把握しようとしている。

「なぜ私的の所有は、貨幣制度にまで進まなければならないのか

「ミル評注」をマルクス物象化論の形成過程の解明という観点から読むとき、そこでは第一の商品、貨幣、及び第三の利子生み資本、という二種の物象化がとりあげられていることに注目しなければならない。

もちろん、後に「資本論」で完成されることになるような物象化論の展開をそこに期待することとはできないが、「経手稿」が資本家的私的の所有を物象化の対象としてとりあげたことを批判したと同様に、ここでは、商品、貨幣及び信用を物象及び物象相互の関係を把えて、これら解明が試みられているのであって、マルクスの物象化論の出発点としての意義をもっているのである。

「ミル評注」も、貨幣及び交換を、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。

「ミルは貨幣を交換の媒介者として、宗教批判の方法としての疎外論を採用して把えなおすことからはじめている。物象を物神としてあがめるのではなく、物象を人々の社会的関係として把えようとする物象批判の観点から、宗教批判の方法が適用されることにより、しっかりと打ち立てられているのである。」

貨幣を物象として把え、これを批判して、そこに人間の社会的な行為の疎外を読みとったマルクスは、つぎに、私的の所有の属性にならざることを、私的の所有の属性に把握しようとしている。

「なぜ私的の所有は、貨幣制度にまで進まなければならないのか

か？それは、人間が社会的な動物として交換し、そして交換は——私的の所有の前提のもとで——価値にまで進まざるをえないからである。すなわち、交換をおこなう人間の媒介的な運動は、なんら社会的な運動でも人間の運動でもなく、または私的の所有にたいする私的の所有の抽象的な関係である。そしてこの抽象的な関係が価値であって、この価値の価値としての現実的な実存が、まさしく貨幣なのである。交換をおこなう人間は、人間として相互に交換しあうのではないのだから、物象は人間の所有、人格の所有という意味を失う。私的の所有にたいする私的の所有の社会的な関係というところが、そこにおいては私的の所有が自己自身を疎外している関係である。この関係の対立的な実存である貨幣は、したがって、私的の所有の外在化であり、私的の所有の人格の本性的捨象である。」(同、三六五頁)

「ここには、私的労働の生産物を私的性質を帯びないまま社会的労働に転化する形態が価値であるとする後の見解が萌芽的に示されている。マルクスはこのあと、貨幣を追求して信用貨幣にまで到り、信用制度における物象化の構造を解説したあと、再び価値の分析に移っている。したがって、われわれも、マルクスの提起の順を追って、信用制度の分析をみよう。」

「信用においては、金属や紙にかわって人間そのものが、ただ人間としてではなく、一個の資本とその利子の定在として、交換の仲介者になっている。したがって、なるほど交換の媒介が、物質的な形態から人間へとたちかえり、人間に復帰してはいるけれども、しかしそれは、人間それぞれ自身で一個の物質的な形態にわたっているからにすぎない。信用関係の内部では、貨幣が人間において揚棄されるのではなく、人間それぞれ自身が貨幣に転化している、いはいえれば、貨幣が人間と合体しているのである。」(同、三六七―三七八頁)

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

「私が私的の所有物を外在化するということは、それを他人に譲渡することだが、交換の場合に見られる外在化された私的の所有とは、それが私的の所有であることをやめながらも私的の所有であることと併存するものである。つまり、私的の所有が自己自身を疎外して、同時に、私的の所有の外在化である。したがって、私的の所有の外在化は、私的の所有の人格の本性的捨象である。」(同、三六五頁)

「交換あるいは交換取引は、したがって、私的の所有の内部での人間の社会的な行為、類的行為、共同の本質、社会的な交通の外在化された類的行為である。まさにこのために、類的行為が交換取引として現象するのである。したがって交換取引は、また、社会的な関係の反対物である。」(同、三六七―三七八頁)

「私的の所有者の社会的な関係とは交換であり、交換とは私的の所有の内部での人間の社会的な行為であるが、しかしながら、この交換は私的関係であり、社会的な関係の反対物であるとマルクスは展開している。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

あることをやめているからである。なぜならこの占有者は、すでにそれを外在化しているのだから、私的の所有はそれを生産した占有者の手からはなれ、それを生産した人間的な意味を失っている。第二に、この私的の所有は他の私的の所有と関係づけられ、これと等置されている。この私的の所有の位置には他の性質をもつ私的の所有がはいりこみ、逆にこの私的の所有が他を代表している。したがって、私的の所有の位置を代表している。したがって、私的の所有の位置を代表している。」

「交換あるいは交換取引は、したがって、私的の所有の内部での人間の社会的な行為、類的行為、共同の本質、社会的な交通の外在化された類的行為である。まさにこのために、類的行為が交換取引として現象するのである。したがって交換取引は、また、社会的な関係の反対物である。」(同、三六七―三七八頁)

「私的の所有者の社会的な関係とは交換であり、交換とは私的の所有の内部での人間の社会的な行為であるが、しかしながら、この交換は私的関係であり、社会的な関係の反対物であるとマルクスは展開している。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

「私が私的の所有物を外在化するということは、それを他人に譲渡することだが、交換の場合に見られる外在化された私的の所有とは、それが私的の所有であることをやめながらも私的の所有であることと併存するものである。つまり、私的の所有が自己自身を疎外して、同時に、私的の所有の外在化である。したがって、私的の所有の外在化は、私的の所有の人格の本性的捨象である。」(同、三六五頁)

「交換あるいは交換取引は、したがって、私的の所有の内部での人間の社会的な行為、類的行為、共同の本質、社会的な交通の外在化された類的行為である。まさにこのために、類的行為が交換取引として現象するのである。したがって交換取引は、また、社会的な関係の反対物である。」(同、三六七―三七八頁)

「私的の所有者の社会的な関係とは交換であり、交換とは私的の所有の内部での人間の社会的な行為であるが、しかしながら、この交換は私的関係であり、社会的な関係の反対物であるとマルクスは展開している。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

「私が私的の所有物を外在化するということは、それを他人に譲渡することだが、交換の場合に見られる外在化された私的の所有とは、それが私的の所有であることをやめながらも私的の所有であることと併存するものである。つまり、私的の所有が自己自身を疎外して、同時に、私的の所有の外在化である。したがって、私的の所有の外在化は、私的の所有の人格の本性的捨象である。」(同、三六五頁)

「交換あるいは交換取引は、したがって、私的の所有の内部での人間の社会的な行為、類的行為、共同の本質、社会的な交通の外在化された類的行為である。まさにこのために、類的行為が交換取引として現象するのである。したがって交換取引は、また、社会的な関係の反対物である。」(同、三六七―三七八頁)

「私的の所有者の社会的な関係とは交換であり、交換とは私的の所有の内部での人間の社会的な行為であるが、しかしながら、この交換は私的関係であり、社会的な関係の反対物であるとマルクスは展開している。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

「この社会的関係が、社会的な関係とは反対の私的関係である。したがって、私的の所有の本質にせまれている。私的の所有の本質にせまれている。」

物象化論の出発点

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

交換の物象化

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

協働の物象化

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

疎外論から物象化論へ

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

物象化論の発展

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

結論

「マルクスは価値に関する一連の分析を、まず私的の所有そのものの外在化という規定にもとづいて交換を考察することから始めている。」

みにもわざわざいわれている。廣松の物象化論とは、物象の分析の一種の認識論である。彼のこの独自の認識論からすれば、『ドイツ・イデオロギー』の分析は、自然発生の協働の物象化論は発想としてそれ以前のマルクスの思想からの一大飛躍に見え、ということが、廣松をして、疎外論から物象化論へと語らせているといえよう。

われわれはマルクスの物象化論を、何よりも、商品・貨幣・資本といった諸物象の分析の総体として把握する。それゆえ、

第三節 物象それ自体の解明

『経済学批判要綱』

(一) 若きマルクスの物象化論の統合

「ミル評注」での商品・貨幣の分析は、その後「哲学の貧困」で表明した労働価値説の立場から深められた。「要綱」では商品からの貨幣の生成は、つぎのように分析されている。

「商品（生産物または生産用具）はいずれも、一定の労働時間の対象に等しい。商品の価値、すなわち商品が他の諸商品と交換され、あるいはまた他の諸商品がその商品と交換される割合は、その商品に実現されている労働時間の分量に等しい。……商品、たとえばエレの綿花と一マースの油とは、綿花および油として見れば、当然にちがっており、異なる諸性質をもち、異なる尺度で測られ、通約することはできない。諸価値としては、すべての商品は質的に等しく、ただ量的にだけ区別されているのであって、したがって、すべて規定された量的割合で相互に測りあい、相互に替りあう（交換され、相互に交換可能である）。価値とは商品の社会的関係であり、商品の経済的性質である。……価値としては、商品は等価物である。等価物としては、商品のすべての自然的諸性質は、商品において消失している。商品は他の商品にたいして、もはや質的な特殊な関係

物象の分析を欠落させた廣松説に同意することはできない。われわれの観点からすれば、物象化の三つのタイプのうち、『ドイツ・イデオロギー』では新らしく第二の、自然発生の協働の下での協働がもたらす労働の生産力の物象化、がとりあげられていることに注目すべきである。

この物象化は、商品・貨幣や利子生み資本の場合の物象化とは異なる仕方で行われているので、先に簡単にふれておいたように、廣松が『ドイツ・イデオロギー』に特別の注目をすると

「相互にたいし無関心な諸個人の相互的に全面的な依存が、彼らの社会的連関を形成する。この社会的連関は交換価値というかたちで表現されているが、各個人にとっては、彼自身の活動または彼の生産物は交換価値というかたちで初めて各個人の間の活動または生産物となるのである。各個人は一つの一般的な生産物を——つまり交換価値を、すなわち対外的に孤立化された、個体化されたそれ、貨幣を生産しなければならぬ。他方では、各個人が他の諸個人の活動のうえに、または社会的富のうえにおよぼす力は、諸交換価値の、つまり貨幣の所有者としての彼のうちにあり、……活動の社会的性格は、生産物の社会的形態と同じように、生産への個人の参加分と同じように、ここでは諸個人に對立して疎遠なもの、物象的なものとして現れる。それは、諸個人の相互的な関係行為としてではなく、諸個人に依存することなく存在し、無関心な諸個人の相互的衝突から生じるような諸関係のもとへ諸個人を服属させることとして現れる。各個々の個人にとって生活条件となつてしまつてゐるところの、諸活動と諸生産物との一般的な交換、それらの相互的な連関は、彼ら自身には疎遠で、彼らから独立したものと現われ、つまり一つの物象として扱われる。交換価値に對しては、人格と人格との社会的関係行為が物象としており、こうして交換価値は、人々の社会的連関の現象形態として把握されることになった。

マルクスは、ここで「交換価値においては、人格と人格との社会的連関は物象と物象との一つの社会的関係行為に転化して、人格的な力は物象的な力に転化している」と述べているが、これは、第一の、商品貨幣にかかわる物象化の解明としての意義をもっている。「要綱」における「ミル評注」と「ドイツ・イデオロギー」との統合は、第一の物象化の謎に解答を与えることになったのである。

以降の部分で、貨幣の資本への転化、及び資本の直接的生産過程の分析に手を付け、「経済学批判」の刊行後に再開した「経済学批判」の草稿集「第四巻所収」でこれらの分析を完成して、『ミル評注』と『ドイツ・イデオロギー』の「経・哲手稿」を媒介とした統合に成功する。

さて、先取りをすることはこれぐらいにして、『要綱』に帰ろう。「要綱」には編集者の手で、「貨幣の資本への転化」とか「資本と労働のあいだの交換」という見出しがつけられているが、マルクス自身は「資本としての貨幣にかんする章」という見出しをつけている。編集者の見出しは「資本論」の構想を「要綱」にあてはめているので、『要綱』の内容とは必ずしも一致していない。とくに、「貨幣の資本への転化」とつけられている部分は、その同様の章に見られるような整然とした論理のほかに、若干の断片とすれば裏切られる。

したがって、ここはやはり、「資本としての貨幣にかんする章」として、とりわけ、資本の概念が明らかにされている部分として読むことが必要である。マルクスは、資本としての貨幣の分析を、貨幣の謎的性格の指摘から始めている。

「貨幣を貨幣としてのその完全な規定性において把握することとを、とくに困難にしているものと、一つの社会関係、つまり諸個人相互間の一つの規定された連関が、ここではある金属として、ある石として、すなわち彼らの外部にある純粋に物象的な物象として現われ、しかもこの物象は自然のうちにそのまゝの姿で見いだされ、またその自然的存在から区別されるような形態規定はもはややむを得ないに残留していない、というところである。」（同、二七三頁）

ここでマルクスは後に自らから名づけることになる、貨幣の物本性に言及している。といつても、その神秘的性格の強調よりはむしろ、物象としての貨幣において、物象の属性である人々の間の社会的関係が消失去られて見られることを指摘し、その消失去られた内容を分析によつて解説するといふ姿勢から、その神秘的性格を指摘している。この指摘は、貨幣を資本として分析しようとする際に避けて通ることのできないものであった。なぜなら、貨幣の資本への転化を媒介する資本家と労働者との間の労働力の売買は貨幣関係としてあらわれ、かつこの貨幣関係が交換者の平等を規定して、資本家と労働者のより深刻な経済的関係を消してしまつてからである。

貨幣の謎的性格についての考察は、物象化が伴う物象化をそれとしてとりあげる必要性を生じる。

「貨幣において、交換価値が、すなわち諸交換価値としての諸商品のあらゆる連関が、物として現われるように、資本においては、諸交換価値をつくりだす活動、すなわち労働のあらゆる規定が、物として現われる。」（同、二九五―六頁）

この物として現われている資本本を物象として把握し、分析すること、このことが課題となる。

「貨幣としての貨幣において、交換価値は、すでに流通にたいして一つの自立的形態をもち得ているが、しかしこの自立的形態は否定的で消滅的な形態にすぎず、あるいは、それが固定化されれば幻想的な形態であるにすぎない。貨幣は、流通にかかわつてのみ、また流通にはいりこむ可能性としてのみ存在する。しかしそれは自己を実現してしまつていなくなつた規定を失ひ、諸交換価値の尺度および交換手段という、以前の二つの規定に逆もどりする。流通にたいして自己を自立化させるだけでなく、また流通のなかで自己を保持するような交換価値として、貨幣が指定されるやいなや、それはもはや貨幣ではなく、貨幣の形態規定は貨幣そのものといふものも貨幣は貨幣そのものとして否定的な規定を超えることにはないのだから、資本なのである。」（同、三〇三頁）

マルクスは、まず資本としての貨幣と貨幣としての貨幣との区別をつけることからはじめる。貨幣を物として把握している限りにおいては、この区別は判明しないが、貨幣を商品との連関で物象として把握し、価値の尺度

および交換手段という貨幣の規定を見いだすことができれば、流通のなかで自己を保持するような交換価値は、貨幣ではありながら貨幣ではない資本の規定に到達している。

この資本としての貨幣は一つの過程をなしている。この過程はG—W—Gを、マルクスは資本と労働との関係として把握する。「貨幣は（流通から自分自身に立ち帰つたものとしての）資本としては、その硬直性を失つてしまひ、一つの手につかめる物から一つの過程となつたのである。しかし他方では、労働はその対象性にたいするみずからその対象性を変えてしまつている。労働もまた、自身自身に復歸したのである。だがこの復歸は次のようなものである。すなわち、もともと交換価値とはたんに労働の生産物としてのみ現われていたにすぎなかつたのに、交換価値に對象化された労働が、生きた労働を交換価値の再生産の手段として指定するのである。」（同、三二〇頁）

貨幣への資本の転化に関して、『要綱』では事実上解明されているが、しかしその論理的整理と体系化は後のノートにまたねばならなかつたこと、このことはさきに指摘しておいた。

しかしマルクスは事実上の解明によつて、労働の對象化と交換価値と貨幣と資本としての貨幣と對象化された労働が生きた労働を交換価値の再生産の手段とする。したがって、労働と労働生産物の所有との分離、つまり労働と富との分離、つまり労働行為そのものうちに指定されている。結果として逆説的に見えるものが、すでに前提的に見られるのである。経済学者たちは、多かれ少なかれ経験的にこのことを表現してきた。こうして労働者の労働力が能ではなく、運動であり、現実的労働であるかぎり、彼の労働の生産性は、またそもそも彼の労働は、労働者に對立する他人の力となる。逆に資本は、他人の労働の領有によつて自分自身を価値増殖させるのである。」（同、三七二頁）

マルクスの疎外された労働論は、何よりも労働と労働生産物の所有との分離を出発点にしてきた。この所有と労働との分離

(二) 「資本と労働のあいだの交換」所有と労働の分離

「要綱」における「ミル評注」と「ドイツ・イデオロギー」との統合は、しかしこれで終了したわけではない。何よりもまだ「経・哲手稿」第一手稿が手がけた分野、資本の直接的生産過程における資本と労働との関係は、「要綱」のこれまでのところにはまだ分析されていない。だからまだ、貨幣の資本への転化を解明して、『ミル評注』と「経・哲手稿」を統合するといふ課題が残されているし、また「経・哲手稿」と「ドイツ・イデオロギー」とを統合するといふ課題もあるはずである。

マルクスは、さきに解明した交換価値における物象化をさら一般的に流通過程における物象化として扱へおとしてつぎのように述べている。

「諸個人自身の相互的衝突が、彼らにたいして疎遠な社会的力を彼らにたいして生産する。つまり彼らの相互作用が、彼らから独立した過程として、強力として現われる。流通は、社会的過程の総体であるから、またたとえば貨幣片、または交換価値といったものは、あつてのうちに、社会的関係が諸個人から独立したものであるとして現われ

以降の部分で、貨幣の資本への転化、及び資本の直接的生産過程の分析に手を付け、「経済学批判」の刊行後に再開した「経済学批判」の草稿集「第四巻所収」でこれらの分析を完成して、『ミル評注』と『ドイツ・イデオロギー』の「経・哲手稿」を媒介とした統合に成功する。

さて、先取りをすることはこれぐらいにして、『要綱』に帰ろう。「要綱」には編集者の手で、「貨幣の資本への転化」とか「資本と労働のあいだの交換」という見出しがつけられているが、マルクス自身は「資本としての貨幣にかんする章」という見出しをつけている。編集者の見出しは「資本論」の構想を「要綱」にあてはめているので、『要綱』の内容とは必ずしも一致していない。とくに、「貨幣の資本への転化」とつけられている部分は、その同様の章に見られるような整然とした論理のほかに、若干の断片とすれば裏切られる。

したがって、ここはやはり、「資本としての貨幣にかんする章」として、とりわけ、資本の概念が明らかにされている部分として読むことが必要である。マルクスは、資本としての貨幣の分析を、貨幣の謎的性格の指摘から始めている。

「貨幣を貨幣としてのその完全な規定性において把握することとを、とくに困難にしているものと、一つの社会関係、つまり諸個人相互間の一つの規定された連関が、ここではある金属として、ある石として、すなわち彼らの外部にある純粋に物象的な物象として現われ、しかもこの物象は自然のうちにそのまゝの姿で見いだされ、またその自然的存在から区別されるような形態規定はもはややむを得ないに残留していない、というところである。」（同、二七三頁）

ここでマルクスは後に自らから名づけることになる、貨幣の物本性に言及している。といつても、その神秘的性格の強調よりはむしろ、物象としての貨幣において、物象の属性である人々の間の社会的関係が消失去られて見られることを指摘し、その消失去られた内容を分析によつて解説するといふ姿勢から、その神秘的性格を指摘している。この指摘は、貨幣を資本として分析しようとする際に避けて通ることのできないものであった。なぜなら、貨幣の資本への転化を媒介する資本家と労働者との間の労働力の売買は貨幣関係としてあらわれ、かつこの貨幣関係が交換者の平等を規定して、資本家と労働者のより深刻な経済的関係を消してしまつてからである。

貨幣の謎的性格についての考察は、物象化が伴う物象化をそれとしてとりあげる必要性を生じる。

「貨幣において、交換価値が、すなわち諸交換価値としての諸商品のあらゆる連関が、物として現われるように、資本においては、諸交換価値をつくりだす活動、すなわち労働のあらゆる規定が、物として現われる。」（同、二九五―六頁）

この物として現われている資本本を物象として把握し、分析すること、このことが課題となる。

「貨幣としての貨幣において、交換価値は、すでに流通にたいして一つの自立的形態をもち得ているが、しかしこの自立的形態は否定的で消滅的な形態にすぎず、あるいは、それが固定化されれば幻想的な形態であるにすぎない。貨幣は、流通にかかわつてのみ、また流通にはいりこむ可能性としてのみ存在する。しかしそれは自己を実現してしまつていなくなつた規定を失ひ、諸交換価値の尺度および交換手段という、以前の二つの規定に逆もどりする。流通にたいして自己を自立化させるだけでなく、また流通のなかで自己を保持するような交換価値として、貨幣が指定されるやいなや、それはもはや貨幣ではなく、貨幣の形態規定は貨幣そのものといふものも貨幣は貨幣そのものとして否定的な規定を超えることにはないのだから、資本なのである。」（同、三〇三頁）

マルクスは、まず資本としての貨幣と貨幣としての貨幣との区別をつけることからはじめる。貨幣を物として把握している限りにおいては、この区別は判明しないが、貨幣を商品との連関で物象として把握し、価値の尺度

「相互にたいし無関心な諸個人の相互的に全面的な依存が、彼らの社会的連関を形成する。この社会的連関は交換価値というかたちで表現されているが、各個人にとっては、彼自身の活動または彼の生産物は交換価値というかたちで初めて各個人の間の活動または生産物となるのである。各個人は一つの一般的な生産物を——つまり交換価値を、すなわち対外的に孤立化された、個体化されたそれ、貨幣を生産しなければならぬ。他方では、各個人が他の諸個人の活動のうえに、または社会的富のうえにおよぼす力は、諸交換価値の、つまり貨幣の所有者としての彼のうちにあり、……活動の社会的性格は、生産物の社会的形態と同じように、生産への個人の参加分と同じように、ここでは諸個人に對立して疎遠なもの、物象的なものとして現れる。それは、諸個人の相互的な関係行為としてではなく、諸個人に依存することなく存在し、無関心な諸個人の相互的衝突から生じるような諸関係のもとへ諸個人を服属させることとして現れる。各個々の個人にとって生活条件となつてしまつてゐるところの、諸活動と諸生産物との一般的な交換、それらの相互的な連関は、彼ら自身には疎遠で、彼らから独立したものと現われ、つまり一つの物象として扱われる。交換価値に對しては、人格と人格との社会的関係行為が物象としており、こうして交換価値は、人々の社会的連関の現象形態として把握されることになった。

マルクスは、ここで「交換価値においては、人格と人格との社会的連関は物象と物象との一つの社会的関係行為に転化して、人格的な力は物象的な力に転化している」と述べているが、これは、第一の、商品貨幣にかかわる物象化の解明としての意義をもっている。「要綱」における「ミル評注」と「ドイツ・イデオロギー」との統合は、第一の物象化の謎に解答を与えることになったのである。

以降の部分で、貨幣の資本への転化、及び資本の直接的生産過程の分析に手を付け、「経済学批判」の刊行後に再開した「経済学批判」の草稿集「第四巻所収」でこれらの分析を完成して、『ミル評注』と『ドイツ・イデオロギー』の「経・哲手稿」を媒介とした統合に成功する。

さて、先取りをすることはこれぐらいにして、『要綱』に帰ろう。「要綱」には編集者の手で、「貨幣の資本への転化」とか「資本と労働のあいだの交換」という見出しがつけられているが、マルクス自身は「資本としての貨幣にかんする章」という見出しをつけている。編集者の見出しは「資本論」の構想を「要綱」にあてはめているので、『要綱』の内容とは必ずしも一致していない。とくに、「貨幣の資本への転化」とつけられている部分は、その同様の章に見られるような整然とした論理のほかに、若干の断片とすれば裏切られる。

したがって、ここはやはり、「資本としての貨幣にかんする章」として、とりわけ、資本の概念が明らかにされている部分として読むことが必要である。マルクスは、資本としての貨幣の分析を、貨幣の謎的性格の指摘から始めている。

「貨幣を貨幣としてのその完全な規定性において把握することとを、とくに困難にしているものと、一つの社会関係、つまり諸個人相互間の一つの規定された連関が、ここではある金属として、ある石として、すなわち彼らの外部にある純粋に物象的な物象として現われ、しかもこの物象は自然のうちにそのまゝの姿で見いだされ、またその自然的存在から区別されるような形態規定はもはややむを得ないに残留していない、というところである。」（同、二七三頁）

ここでマルクスは後に自らから名づけることになる、貨幣の物本性に言及している。といつても、その神秘的性格の強調よりはむしろ、物象としての貨幣において、物象の属性である人々の間の社会的関係が消失去られて見られることを指摘し、その消失去られた内容を分析によつて解説するといふ姿勢から、その神秘的性格を指摘している。この指摘は、貨幣を資本として分析しようとする際に避けて通ることのできないものであった。なぜなら、貨幣の資本への転化を媒介する資本家と労働者との間の労働力の売買は貨幣関係としてあらわれ、かつこの貨幣関係が交換者の平等を規定して、資本家と労働者のより深刻な経済的関係を消してしまつてからである。

貨幣の謎的性格についての考察は、物象化が伴う物象化をそれとしてとりあげる必要性を生じる。

「貨幣において、交換価値が、すなわち諸交換価値としての諸商品のあらゆる連関が、物として現われるように、資本においては、諸交換価値をつくりだす活動、すなわち労働のあらゆる規定が、物として現われる。」（同、二九五―六頁）

この物として現われている資本本を物象として把握し、分析すること、このことが課題となる。

「貨幣としての貨幣において、交換価値は、すでに流通にたいして一つの自立的形態をもち得ているが、しかしこの自立的形態は否定的で消滅的な形態にすぎず、あるいは、それが固定化されれば幻想的な形態であるにすぎない。貨幣は、流通にかかわつてのみ、また流通にはいりこむ可能性としてのみ存在する。しかしそれは自己を実現してしまつていなくなつた規定を失ひ、諸交換価値の尺度および交換手段という、以前の二つの規定に逆もどりする。流通にたいして自己を自立化させるだけでなく、また流通のなかで自己を保持するような交換価値として、貨幣が指定されるやいなや、それはもはや貨幣ではなく、貨幣の形態規定は貨幣そのものといふものも貨幣は貨幣そのものとして否定的な規定を超えることにはないのだから、資本なのである。」（同、三〇三頁）

マルクスは、まず資本としての貨幣と貨幣としての貨幣との区別をつけることからはじめる。貨幣を物として把握している限りにおいては、この区別は判明しないが、貨幣を商品との連関で物象として把握し、価値の尺度

および交換手段という貨幣の規定を見いだすことができれば、流通のなかで自己を保持するような交換価値は、貨幣ではありながら貨幣ではない資本の規定に到達している。

この資本としての貨幣は一つの過程をなしている。この過程はG—W—Gを、マルクスは資本と労働との関係として把握する。「貨幣は（流通から自分自身に立ち帰つたものとしての）資本としては、その硬直性を失つてしまひ、一つの手につかめる物から一つの過程となつたのである。しかし他方では、労働はその対象性にたいするみずからその対象性を変えてしまつている。労働もまた、自身自身に復歸したのである。だがこの復歸は次のようなものである。すなわち、もともと交換価値とはたんに労働の生産物としてのみ現われていたにすぎなかつたのに、交換価値に對象化された労働が、生きた労働を交換価値の再生産の手段として指定するのである。」（同、三二〇頁）

貨幣への資本の転化に関して、『要綱』では事実上解明されているが、しかしその論理的整理と体系化は後のノートにまたねばならなかつたこと、このことはさきに指摘しておいた。

しかしマルクスは事実上の解明によつて、労働の對象化と交換価値と貨幣と資本としての貨幣と對象化された労働が生きた労働を交換価値の再生産の手段とする。したがって、労働と労働生産物の所有との分離、つまり労働と富との分離、つまり労働行為そのものうちに指定されている。結果として逆説的に見えるものが、すでに前提的に見られるのである。経済学者たちは、多かれ少なかれ経験的にこのことを表現してきた。こうして労働者の労働力が能ではなく、運動であり、現実的労働であるかぎり、彼の労働の生産性は、またそもそも彼の労働は、労働者に對立する他人の力となる。逆に資本は、他人の労働の領有によつて自分自身を価値増殖させるのである。」（同、三七二頁）

マルクスの疎外された労働論は、何よりも労働と労働生産物の所有との分離を出発点にしてきた。この所有と労働との分離

共産主義20号 発売中
(内容)「国際主義の復興」他